

## 10 人材育成・文化・スポーツ振興特別委員会における前原かつえ県議の質疑

2016年6月23日

## Q．前原委員

- 1 学力調査において、結果の公表や順位を発表を行う必要は本当にあるのかと基本的なところで思う。資料に書いていない口頭説明で、全国学力調査において埼玉県は全国平均を下回ったという発言があった。休み時間や放課後まで学力テスト対策ということで過去問題を解いたりなど勉強を行っており、子どもたちが分かる喜び、知る喜び、できる喜びを実感させるための本当のやり方ではないと思う。その点について、国が実施していることだからということかもしれないが、回を重ねることによって教育をゆがめ、序列化や過度な競争を促している気がする。そのことについて基本的な考えを伺いたい。
- 2 人間わかき高等特別支援学校の普通科には給食があるが職業学科には給食がない。教育的配慮の観点からの考えなのか教えてほしい。
- 3 県南部地域の教室不足があると認識しているそうだが、短期的な取組でパーテーションを設置して教室を増やすことは、隣の教室の音が聞こえるなど本来の意味での教室不足解消の対策とはならないと思う。長期的な取組みとして施設を建設し、教室を確保することが必要と考えるが、今後の施設建設の考え方を教えてほしい。ほかのところでも話題が上がっていると思うが、障害を持った子どもたちが、スクールバスで1時間以上かけて通学する問題もあるので、今後の設置目標についても教えてほしい。
- 4 先ほど臨時的任用の教員の割合の話があったが、そこで働く教員への待遇が悪ければ、充実した教育内容につながらないと思う。今後の臨任教員に対する考え方を示していただきたい。

- 5 特別支援の通級による指導について、保護者から「特別支援学級があることにより救われた」などの声がある一方、「小学校に特別支援学級はあるが、進学する中学校にないため不安だ」との声も届いている。中学校における通級による指導について、今後どのように取り組んでいくのか教えてほしい。

## A．義務教育指導課長

- 1 全ての子どもたちに一定の学力をきちんと身に付けさせていくということは非常に重要なことだと考えている。学力を伸ばすためには、保護者などとも情報を共有し、その上で、結果の公表が1つの有効な手段だとも思っている。また、様々な問題を活用しながら、日々、定着を図る取り組みを続けていくことは重要だと思っている。今回の全国学力調査の結果については真摯に受け止め、単に点数を上げるだけでなく、本人たちの主体性等も伸ばしながら、全ての子どもたちに学力をきちんと身に付けさせていけるよう、県としては市町村を支援していきたいと考えている。

## A．特別支援教育課長

- 2 職業学科のあるさいたま桜高等学園や羽生ふじ高等学園に給食はない。職業学科の生徒には、社会の中で自立することが求められるので、自分たちで弁当を作ってくる、自分たちでコンビニに買いに行く、又は弁当を頼むなど、いろいろな形で社会の中で生きていくための知恵を出し合いながら勉強していくのが職業学科だと思う。このような教育的な効果の観点からそのような対応をしている。
- 3 児童生徒数の増加による県南部地域の教室

不足の問題については対策をしっかりとやらせていただく。また、状況によって適切に対応していく。

- 5 国の加配により市町村の通級指導の要望に応えているが、全国的に見ても中学校に通級指導教室を設置しているケースは多くない。しかし、必要としている生徒がいるので、本県独自の支援籍や特別支援学級の教員が通常学級を支援する取り組みを進めており、今後もそのような対応をしていきたいと考えている。

#### A．県立学校人事課長

- 4 特別支援学校については、臨任率が高いということは承知しており、また臨任が多いことで継続的な学校運営に支障があるということも認識しているところである。したがって、臨時的任用教員数を減らしていく努力はしているところである。今後についても、臨時的任用教員数の減少に努めていく。

#### Q．前原委員

学力調査の実施の理由が教育指導の充実などに役立つためということであれば、抽出調査にして何年かに1回というやり方でもよいのではないかと思う。現場の教員はそういうことに対しての作業が大変で、非常に混乱している。日々の中で、子どもたちに直に接触しているわけだから、県の学力調査については、今回のように小学校4年生から中学校3年生までの全ての児童生徒に毎年実施するということではなくて、何年かに1回実施するということなども考えていただければと思うが、その点についてはどうか。

#### A．義務教育指導課長

県の学力調査により、こういった指導が学力を伸ばしていくかという点を把握するとともに、子ども1人1人の学力を伸ばしていき、昨年の自分と今の自分との比較において少しでも伸びたということが自信につながり、そしてそのことが学習の意欲につながっていくものと考えている。そういった学力の伸びが分かる喜びを児童生徒1人1人が実感していくという点において、全ての児童生徒を経年的に調査するということが必要だと考えている。また、学校現場においては、児童生徒1人1人の学力を把握していくという作業が生じているため、そういった作業により混乱が生じないようにマニュアルを作成する。また、今後の分析についても、分析例を示すなど、分析自体に多大な時間を割くのではなく、子どもたちへの指導を良くすることに時間を使えるよう支援をしていきたいと思っている。